

目次

はじめに	2
1 自己紹介	10
2 サモア紹介	19
3 ティアベア村	32
4 ウム料理	43
5 教育	50
6 文化	56
7 スポーツ	69
8 交通	80
9 観光	88

10	水	100
11	日本支援	110
12	病院	119
13	検査室	125
14	デング熱	133
15	ジカ熱、リンパ系フィラリア症、麻しん	141
16	新型コロナウイルス感染	147
17	特別寄稿 マナイサモア	153
	終わりに	163

はじめに

この本を手にした方は、国際機関で働いてみたい、JICA 海外協力隊に参加してみたい、開発途上国の発展に役に立ちたい、異文化交流をしてみたい、という気持ちを抱えている方が多いのではないかと思います。でもやってみたいと思っても、「外国語が苦手だから」、「自分の知識・技術レベルでは役には立たないんじゃないか」、「家族の理解が得られない」、という様々な理由で諦めようとしている人が多いのも現実だろうと思います。

私は学生時代から開発途上国の発展に少しでも役に立ちたいと思っていました。でも学生の私は、それに向けて、どのようにすれば良いのか分からなかったというのが正直なところです。そして就職し結婚もすると、もはや仕事や家庭があるので、とても外国で活動するなんて考えも出来ませんでした。そんな私にも55歳になった時に、「今なら行けるかも」、「今しか行けない」、と思えるタイミングがありました。それでも、本当に JICA 海外協力隊に挑戦するの、と悩みました。そんな時に頭をかすめた言葉が、Apple の共同創業者の一人で CEO を務めたスティーブ・ジョブズ氏が米スタンフォード大学の卒業式で行ったスピーチの一節である「Stay hungry. Stay foolish (ハングリーであれ。愚か者であれ)」という有名な一言です。やはり人生は短いので、自分が死の床に伏した時に、やりたいと思っても出来なかったことは後悔しても後悔しきれないだろうと考えたのです。その

ような事が相まって私はJICA海外協力隊としてサモア派遣へ挑戦することとなりました。

幸いにもサモア独立国(以後、サモアと略)派遣の候補となり、駒ヶ根訓練所で協力隊員としての必要な姿勢や態度、言語や異文化理解などの訓練に入りました。その頃から、訓練の様子やサモアに行つてからの出来事を、家族に伝えるだけではもつたないと思ひ、JICA海外協力隊に参加してみたいという方に何らかの参考になれば、との思ひでブログ(<http://yasusan.cocolog-nifty.com/blog/>)として日々の出来事を記録していきましました。いまブログを読み返すと、拙いブログではありますが、やはり記録する事の大切さをしみじみと感じています。

さて、本論に入る前に「外国語が苦手だから」という理由で、海外でJICA海外協力隊への挑戦を躊躇している方に、私の経験をお話しておきます。派遣に向けての候補生となると、任地での言語はもとより、生活に必要な姿勢や態度、異文化理解などの最低限の講義を受けるだけでなく、予防接種や渡航手続きを目的として、二本松(福島県)もしくは駒ヶ根(長野県)で訓練を受けることになります。サモアの公用語はサモア語と英語です。従つて私は駒ヶ根訓練所で英語を鍛えていただき、無事、派遣となりました。

ところが、現実的にはこの訓練だけでは、現地の人と十分な意思疎通を図れません。私も同様で、サモア国立病院の臨床検査室で活動を始めたころは、サモア人が話すサモア語なまりの英語と私の日本語なまりの英語では、なかなかコミュニケーションがとれません。そんな時、検査室のスタッフであるフィジー人のダイアナという女性と雑談をしている中で、「僕は英語が上手じゃないから、

みんなと十分なコミュニケーションがとれないよ」と弱音を吐いた時に、「ヤス(私のニックネーム)の英語はそんなに下手じゃないよ。ほら、もう15分も私とお喋りしていたよ」と言われた時は涙が出そうなくらい嬉しかったです。そうしていく中で、サモア人が私に訳の分からないサモア語(下ネタも含)を教えてくれるようになり、私が大きな声で練習していると、検査室中に笑いが起こるようになってきました。あたかもプロ野球の阪神の外国人選手が、甲子園球場でのインタビュー時に大阪弁で答えて、球場を笑いに包んでいるような状態を想像してもらえればと思います。この様な事を繰り返す中で、私は次第にサモア人と、英語の中に時々サモア語、更にほんの少しの日本語が飛び交うという環境でサモア人とコミュニケーションがとれるようになりました。言葉というのはツールであり、完璧な外国語を話せるに越したことはありませんが、少々、文法が間違っているように、発音が変わであろうが、話そうという姿勢が大切なんじゃないかと思えます。そうしていく中でお互いの人間関係が構築され、お互いを理解しようとする気持ちを経る言葉でコミュニケーションが取れるんじゃないか、というのが正直なところです。

私の経験はたった2年間ですが、日本から7,507キロも遠く離れた南半球の島国であるサモア独立国の人たちが日本や日本文化をどのように思っているかよく分かりました。彼らは日本に対してとっても好意的で、私たちが想像する以上に日本をよく知っています。日本人は勤勉で優しい、日本はインフラが整っている、街並みは清潔でとっても綺麗、自然が豊かで、古くからの素晴らしい文化・伝統が残っている、などとよく言ってくれました。さらに面白いのは、「まだ日本にはニンジャはい

るのか」、「ヤス(私のニックネーム)の祖先はサムライか」に始まり、近年の話題からは「トトロ(スタジオジブリ制作の長編アニメーション映画)、「可愛いね」、「志村けん、面白いね」とまで、彼らは私たちが思う以上に日本をよく見ています。このように言ってもらうと、やっぱり日本人として嬉しいものです。改めて「日本って、良い国だな〜、でも責任は重いよな〜。」そして「日本(人)は、まだまだ捨てたもんじゃないよ。」と思えてきたものです。

さて、私たち日本人は、どれだけサモアの事を知っているのでしょうか。この本を書いた理由の一つに、一人でも多くの日本人に素朴で素晴らしい文化・伝統をもつサモア国を、とつても人懐っこく優しいサモア人を知って欲しいとの願いがあります。

この本の内容は(株)宇宙堂八木書店「医療と検査機器・試薬」Vol. 43 2020年No. 6からVol. 45 2022年No. 6まで計15回にわたって掲載して頂いたエッセーを加筆・修正しまとめたものです。従って内容は臨床検査技師としてのサモア派遣記録を主題にしていますが、臨床検査を含めた医療に関する内容よりもサモアの素朴な風習や文化を紹介することに多くの頁を費やしました。

海外で活動しておられる方々からすれば、私のJICA海外協力隊サモア派遣なんて、全くもって大した仕事ではありません。ましてサモアの臨床検査の発展に何某かのお手伝いが出来たなんて、とつても思えません。でも、実際に派遣という経験から、「外国語(英語)が苦手」な人には「言葉は出来るに越したことはないけど、現地に行くことでスキルは向上していきますよ」、「自分の知識・技術レベルでは役にはたたないんじゃないか」と思っておられる方には、「知識・技術も大切だけど、

伝えなければならぬことは他にもたくさんありますよ」、*「家族の理解が得られない」*と考えておられる方には「人生の中にはチャンスも巡ってくるかもしれない、大切なことは、その時のために準備を怠らない」ことですよ、そして行って見たら、「結局、学ぶのは自分たちですよ」と言いたいです。

この本が海外へのチャレンジを考えている方の、ほんの少しだけ背中を押せたら幸いです。